

那覇市

御細工所跡

那覇市首里真和志町1丁目



26° 13' 7.07" N
127° 43' 1.62" E



用語解説

●首里古地図

18世紀ごろ作製された首里の地図。原図は沖縄戦で焼失。1910年に模写された地図が、県立図書館に所蔵されている。首里城を中心に、周囲の街並みや屋敷、田畑・河川などが描かれており貴重な資料である。

●尋常高等小学校

尋常小学校と高等小学校を併設した学校。1886（明治19）年～1941（昭和16）年の間使われた名称。現在の小学校1年生から中学2年生の子ども達が学んだ。

発掘調査区全景2



御細工所跡は、首里の城西小学校内に位置する近世の遺跡で、18世紀初頭に描かれた『首里古地図』にその名前が書かれています。いつ造られ、どのような施設であったか等についてはよくわかっていませんが、琉球国時代の王府御用品（国王やその家族が使用する品）の総合製作所と推定されています。この地は、1879（明治12）年頃までには菓草園となり、その後1900（明治33）年には首里尋常高等小学校が建てられました。その後、沖縄戦を経て城西小学校となり、現在に至ります。

●白磁

白磁の素地に透明釉をかけ、高温で焼成した磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本のほか、ヨーロッパでも生産される。沖縄で出土する中国産白磁は、稀に定窯産もあるが、大部分は明代の景德鎮や中国南部を産地とする。

●青磁

釉薬が緑が青色系の色調となる磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本、ベトナム、タイ、ミャンマーなどで生産されている。日本や沖縄で出土する中国産青磁の多くは、元から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で生産されたもの。



真珠道

ためになるかも19ちよこつとコラム

沖縄を代表する観光地となっている首里城。

2018（平成30）年9月、その首里城の城門である「守礼門」の近くで石畳が見つかりました。尚真王代（在位1477～1526年）の1522年、王府によって首里と島尻地方をむすぶ幹線として整備された真珠道です。

整備された当初は、守礼門の東南側を起点として、金城町、識名坂を經由し真玉橋（現在の豊見城市）に至る約4kmの道でした。その後、1553年に真玉橋から先、豊見城グスクの下の北東側、小禄を通って、現在の那覇港にある屋良座森グスクに至る部分が延長され全長8kmの道路となりました。

当時、琉球周辺の海域に倭寇とよばれる海賊が横行していました。その倭寇が那覇港を襲う

●発掘調査区全景 1



国王やその家族が使う道具にキラキラした螺鈿が施されていたんだね。



発掘調査で螺鈿細工の材料になるヤコウガイが大量に出土した場所と首里古地図の御細工所の場所が一致したことから、ここに御細工所があったのだらうと推測されたのだよ。

琉球王国時代の王府御用品総合製作所

1984(昭和59)年に行われた校舎建替え工事の際に遺構が見つかり、その後の緊急発掘調査によりその存在が明らかとなりました。遺構として石造の建物の基礎や排水溝、井戸等が発見されました。また、白磁、青磁、青花、褐釉陶器等の中国

【参考文献】・那覇市教育委員会、1991、『御細工所跡』。

産陶磁器、タイ産「半練土器」、湧田焼や壺屋焼等の沖縄産陶器や灰色瓦が出土しました。特に、漆器の螺鈿細工の材料になるヤコウガイが大量に出土していることから、工房としての機能が想定できます。

●青花

中国産の染付(白地に青色の模様がある磁器)。

●褐釉陶器

酸化鉄を含む釉薬をかけて焼成した陶器。

●タイ産半練土器

タイで焼かれた土器。身と蓋があり、蓋は褐釉陶器の蓋にもなった。

●湧田焼

湧田村(現在的那覇市泉崎周辺)で焼かれていた焼物。

●螺鈿細工

薄く加工したヤコウガイ等の貝殻を、模様の形に切りとり、漆器の木地や漆の面に貼ったりはめこんだりする装飾技法のこと。

●ヤコウガイ

リュウテンサザエ科の大型巻貝。貝殻が美しい光沢を持つため、螺鈿細工の材料として使われた。

事を想定し真珠道が整備されました。1522年に建立された「真珠湊碑文」という、真珠道や真玉橋が架けられたことを記録した碑には、「真珠道および真玉橋は一般交通の利便に供するほか、国土の防衛のため王命により建設された。一旦ことある時には、首里の軍勢と南風原、島襲(添)大里、知念、佐敷の軍勢は、真玉橋を渡って下島尻の軍勢と合流し、那覇港口の南岸垣花に勢揃いして外敵の侵入に備えた。」と記されています。

真珠道は琉球という国を守るための軍用道路だったのです。

真珠道は今でも那覇市の金城町の石畳道等に、その名残をとどめています。また那覇市繁多川の識名坂の道路工事現場からも、真珠道だろうと考えられる石畳が見つかりました。毎日、多くの観光客が訪れる守礼門の足元に、王府時代の石畳道が眠っていることを考えると面白いですね。

那覇市

なかぐすく う どうん あと
中城御殿跡
しゅりこうとうがっこうない
(首里高等学校内)

那覇市首里真和志町2丁目



26° 13' 10.08" N
127° 42' 46.59" E

用語解説

●龍潭

1427年に作られた人工の池。魚が多くすんでいたの
で、「魚小堀(イユグムイ)」とも言われていた。「潭」は池の
ことである。

●県立博物館跡地

1966(昭和41)年にそれまで当蔵にあった琉球政府
立博物館が移転してきた場所。この博物館は、1972
年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館となり、同館が
2007(平成19)年におもろまちへ再度移転するまで
この地にあった。



●ガラス製品

●井戸



なかぐすく う どうん りゅうきゅうこく おう あと せいし
中城御殿は、琉球国王の跡を継ぐ世子(王子)
が暮らした屋敷で、尚豊王の代(在位1621~
1640年)に、現在の首里高等学校の敷地内に建
てられたと言われています。その後、1875(光緒
元)年に龍潭の北側(県立博物館跡地)に引っ越
します。

2013~2015(平成25~27)年にかけて沖縄
県が行った発掘調査では、屋敷内の石積みや井
戸のほか、一箇所にまとめて捨てられた食器など
が見つかりました。これらは王子が中城御殿で生
活していた際に利用されたものです。

また、中城御殿より古い時代の遺構や遺物も見
つかりました。建物の柱を立てるための穴やゴミ
捨て穴などです。ゴミ捨て穴には、イノシシやウシ
などの骨、貝殻など食べ物の残りが多く入っ
ており、割れた食器や黄色い模様の入った緑色の
ガラス製品も出土しました。このガラス製品は県
内ではとても珍しいものです。

琉球の王子がどのような場所で過ごしていたの
かがわかる、とても貴重な遺跡として、現在も首
里高等学校の地下に保存されています。

【参考文献】

・沖縄県立埋蔵文化財センター、2017、『中城御殿跡(首里高校内)』。

県内でも珍しい近世のガ
ラス製品がゴミ捨て穴か
ら見つかったのだよ。当
時はとても貴重な物だっ
たはずだけど、割れたら
捨てしまったのだね。



発掘調査で
屋根瓦や金属製品、
食器類等がたくさん
出土したんだね。



● 石積み



首里高等学校地下に眠る琉球の王子が暮らした屋敷跡



● ゴミ捨て穴



● まとめて捨てられた食器



● まとめて捨てられた食器 (復元後)

那覇市 中城御殿跡 (旧県立博物館跡)

那覇市首里大中町



26° 13' 15.17" N
127° 43' 3.04" E



用語解説

●廃藩置県

1871(明治4)年に明治政府がそれまでの藩の制度をなくし、府・県を置いたこと。これにより3府(東京・大阪・京都)と302県が置かれた。沖縄は1872(明治5)年に王国から琉球藩となり、1879(明治12)年に沖縄県となった。

●正殿

首里城正殿のこと。「国殿」または「百浦添御殿(ムンダスィー)」とも呼ばれ、国王が政務を行ったり、重要な儀式に使われたりした。2層で3階建てとなっている。現在の正殿は1992(平成4)年に復元されたもの。

●大美御殿

もとは、尚清王(1497年生まれ、1555年没)が世子時代の別邸として使用された。その後、首里城内の女性の休養・産所・または冠婚葬祭などの儀式を行う場所となり、1853年にはペリー一行の接待も行われている。現在は県立首里高等学校となっている。

●浮道

石やレンガを敷き周囲より高くつくられた道。

階段遺構



中城御殿跡は、琉球国の次期国王となる世子(王子)の邸宅として、尚豊王代(在位1621～1640年)に現在の首里高等学校敷地内に創建されました。

その後、1870(同治9)年に、首里大中町(旧県立博物館跡)への移転が決まり、1875(光緒元年)年に移転が完了しました。そして、1879(明治12)年の廃藩置県により、首里城が明治政府に明け渡されると、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は、一時的に中城御殿に移り住むことになり、「尚侯爵邸」とも呼ばれました。その後、1945(昭和20)年の沖縄戦により、屋敷や敷地を囲う石積みは破壊されてしまいます。

中城御殿の発掘調査は、沖縄県立博物館がおもろまちへ移転した2007(平成19)年から実施しています。調査では中城御殿の建物の区画を示す石列や石畳、排水のための側溝、石敷きの浮道などが確認され、当初想定していたよりも遺構が多く残っていることがわかりました。また当時の人々が使用したと考えられる中国産や本土産の陶磁器、金属製品等多くの遺物が確認されました。

今後、中城御殿跡は発掘調査の成果や写真・図面等の記録類を基に、建物等の復元を行い公園として整備される予定です。

【参考文献】

- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2010。『中城御殿跡(1)』。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2011。『中城御殿跡(2)』。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2012。『中城御殿跡(3)』。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2013。『中城御殿跡(4)』。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2016。『中城御殿跡(5)』。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2018。『中城御殿跡(6)』。

発掘調査区全景



石畳遺構



中城御殿跡は
 2ヶ所にあるね。
 何が違うのかな。



明治期から沖縄戦まで王族が暮らした屋敷跡



発掘調査風景

出土遺物



正門・大御門

【画像提供】沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館



航空写真（1993撮影）



米軍撮影航空写真（1945年撮影）【画像提供】沖縄県教育庁文化財課史料編集班

敷地は約9900㎡で、建物は2640㎡あったんだ。男性だけの表御殿と、女性だけの奥御殿（御内原）に分かれていたんだよ。
 また、出土品からは、建物に関するものとみられる飾り金具やキセル・茶道具、かんざしなどの銅製品、釘や鏝（かすがい）などの鉄製品が見つかったのだよ。



那覇市 沖縄県営鉄道 那覇駅跡

那覇市泉崎1丁目



26° 12' 40.43" N
127° 40' 36.32" E



用語解説

●那覇駅と与那原を結ぶ路線

1914(大正3)年12月2日に、那覇と与那原を結ぶ与那原線(全長約9.8km)の操業が開始された。

●嘉手納や糸満を結ぶ路線

1922(大正11)年に那覇～嘉手納線(約23.6km)、1923(大正12)年に那覇～糸満線(約18.3km)が開業した。



●那覇駅構内【画像提供】那覇市歴史博物館

●敷き詰められた石と埋め込まれた木杭



沖縄県営鉄道は1914(大正3)年、現在の那覇バスターミナル付近にあった那覇駅を起点とし、与那原駅までの路線として開業しました。その後、那覇駅と嘉手納駅、糸満駅を結ぶ路線がそれぞれ開業しましたが、これらの鉄道施設は那覇駅を含め沖縄戦で殆ど破壊されてしまいました。

那覇駅については、戦後同じ場所にバスターミナルが作られたため、当時の施設は残っていないと思われていましたが、この場所を再開発のため工事したところ、「転車台」が発見されました。これは機関車を方向転換させるための施設で、沖縄県営鉄道の駅では那覇駅だけに設置されていたものです。発掘調査の結果、「転車台」はドーナツ状のコンクリート基礎に、レンガを積み上げた構造で、一部破壊されているものの、全体の形がわかる状態で残っていました。その外径は6.8m、高さは最も残りが良い部分で最大1.1mです。基礎部分の下には大小様々な石が敷き詰められ、さらに直径18cm前後の木杭を地中に多数打ち込んで、全体の沈下を防ぐように工夫されていました。

この「転車台」は、近代沖縄の社会や交通の歴史、建築・土木技術など、多くの事を知ることができる大変貴重な文化財です。

【参考文献】

- ・那覇市市民文化部文化財課監修、2016。
『沖縄県営鉄道那覇駅跡』、旭橋都市再開発株式会社。

● 転車台



当時も今もターミナル



● 線路を固定した金具が残る



今の
那覇バスターミナルの
所にあつたんだ。
泉崎は昔から
交通の中心
だったんだね。

軽便鉄道は「ケービン」の愛称で親しまれたのだよ。
駅は赤瓦葺きの木造平屋建てで、駅舎には売店もあり、隣には鉄道管理所や交番が置かれていたのだよ。
また構内には転車台・機関庫・石炭置き場などがあつたのだよ。



クニンドー

いせき

遺跡

南風原町字津嘉山



26° 11' 1.92" N

127° 43' 17.94" E

用語解説

●第一尚氏

尚思紹を始祖とし、7代目の尚徳まで64年間（1406～1469年）続いた王統。1429年、2代尚巴志のとき三山を統一した。

●堀切

敵の侵入を防ぐために掘られた溝。

●空堀

敵の侵入を防ぐための溝で、水を溜めていない。

●ノロ

地域の神事を執り行った女性。王府から辞令書を受けたものを公儀ノロという。



遺跡遠景

●第2段丘の平場に構築された柱穴



高津嘉山の南に広がる丘（クニンドー毛）と、その周辺にある遺跡です。発掘調査の結果、この場所はグスク時代（約900～600年前）から近世（約200年前）にかけて人の活動があったことがわかっており、その時期は大きく三つに分けることができます。

一番古い時期はグスク時代で、津嘉山の古い集落として利用されました。次はグスク時代末～第一尚氏の時代（約650～550年前）で、石積み等が無い「土のグスク」として利用されました。石積みの代わりに大きな空堀（堀切）や柵で防御を固めていたことがわかっています。また、『島尻郡誌』（1937）の記述から、「仲間グスク」と呼ばれた可能性があります。三番目の時期は第一尚氏の時代～近世（約500～200年前）で、地域に伝承が残る屋敷として使用された時代です。その他、沖縄戦時に家財道具を避難させた小屋の跡も発見されました。遺跡は現在も良好な状態で残されています。

【参考文献】

- ・南風原町教育委員会. 1996. 『クニンドー遺跡』.
- ・南風原町教育委員会. 2005. 『クニンドー遺跡(II)』.
- ・金城亀信. 1997. 「仲間グスクの縄張について：クニンドー遺跡の発掘調査の成果をとおして」. 南風の杜（南風原文化センター紀要）（3）：1-14.
- ・南風原町史編集委員会編. 2002. 『南風原町史 第5巻：考古編』. 南風原町役場.

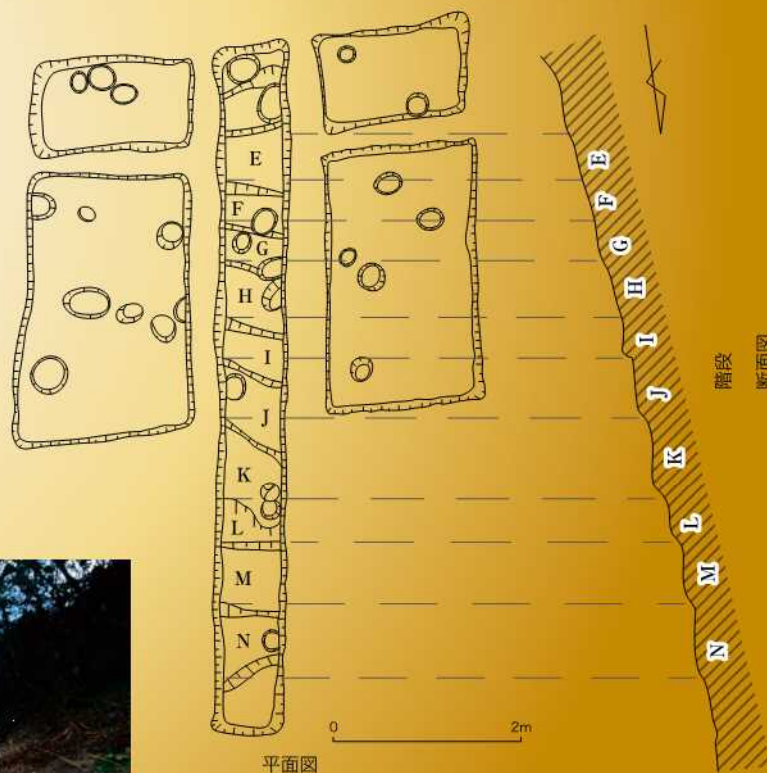
● 北側尾根検出の遺構群(テラス・階段) ※平面図参照



土で築かれたグスク



● 青磁酒会壺



● 参考資料



● 第一段丘 西側掘切



土のグスクは石積みの代わりに大きな空堀や堀で防御を固めていたんだね。



南風原町は石灰岩が少ないので土の山を利用して築城したのだよ。

南風原町 第三二軍司令部 津嘉山壕群

南風原町字津嘉山



26° 11' 17.25" N
127° 43' 13.49" E



用語解説

●第三二軍

沖縄戦のとき、沖縄守備のために編成された日本陸軍の部隊。複数の師団、旅団等で構成され、兵力は11万5000～12万人だった。

●構築作業

組み立てて築く作業。

●坑木

壕内の壁や天井を支える支柱用の木材。



【参考文献】

- ・沖縄県立埋蔵文化財センター。2015。『沖縄県の戦争遺跡』。
- ・南風原町史編集委員会編。1999。『南風原が語る沖縄戦：南風原町史第3巻 戦争編ダイジェスト版』。南風原町。
- ・南風原町史編集委員会編。2013。『戦世の南風原：語るのこすつなぐ』。南風原町。
- ・南風原町教育委員会。2008。『第三二軍司令部津嘉山壕群 津嘉山北地区旧日本軍壕群』。

遺跡全景



だいさんじゅうにぐん し れい ぶ つ か ざん ごうぐん たかつ か ざん
 第三二軍司令部津嘉山壕群は、高津嘉山とい
 う山とチカシ毛という小高い丘に位置する総延
 長約1500～2000mの壕群です。1本の本線
 壕とそれに交差する複数の支線壕からなり、全
 体はムカデのような形をしています。構築作業は
 1944(昭和19)年4月22日から行われました
 が、地盤が弱く見晴らしが悪い等の問題があり
 ました。そのため、12月3日に首里城とその周辺
 に司令部の位置を移すことが決定しました。その
 後、津嘉山の司令部壕は、第三二軍の物資を管
 理する部隊等が使用しました。

2005～2006(平成17～18)年、南風原町
 教育委員会により壕群の一部が発掘され、壕の
 位置や内部の状況がわかりました。壕内の幅と
 高さは約2mで、内部の天井・壁・床に坑木を
 「口」の字型につなぎ補強していました。また、床
 にはぬかるみを防止するための、瓦敷きや排水
 溝が見られ、水はけの悪さがうかがえます。

調査された範囲は、聞き取り調査から要塞建
 築第七中隊、または軍医部が使用していた可能
 性があります。

現在も壕の大部分が当時のまま残されている
 と考えられ、戦時中の様子を伝える遺跡として貴
 重です。

● 蛇行する壕



● 磁器製手榴弾



第三二軍が第二次大戦中に構築した人工壕。
戦時中の様子を伝える貴重な戦争遺跡



● 床材及び遺物出土状況



● 瓦礫舗装の床面



2000も人の力で掘ったなんて、何名の人たちが作業したんだろうね。

南部地域の住民を徴用し壕掘り作業をさせたんだ。ツルハシやスコップを使用して24時間体制で行われたのだよ。

